

私にとっての紀要

学 校 長 日 比 裕

1. 教師の教育研究の自由と紀要

本紀要第33集（1988年度）に当時の学校長の鈴木英一教授の「教師の教育研究の自由」と題する論稿が載せられている。その中で鈴木氏は教師の教育と研究の自由に関する堀尾輝久氏の見解を紹介して、次のように述べている。

「教師の教育研究の自由は、子どもや青年（国民）の学習権を充足させ、『国民の教育を受ける権利』（憲法26条）の実質を保障するために要請されている、教育ということから自体が、教師に一つの学問研究を要請するものであり、学問の自由の規定（憲法23条）は、教師の教育研究の自由をいかなる制限もなく保障するものである」

この堀尾見解を支持しつつ鈴木氏は「わが附属学校の研究紀要をはじめ日常の教育実践とその自由」を広く国民教育の自由という観点から評価すべきことを述べている。

私も本紀要がこの鈴木氏の期待に応えるものであってほしいと考えるのである。

2. 私にとっての紀要

ところで私自身にとって紀要はなんであるかと問いかけてみると、それに自答する前に、紀要とのつきあいやいぶん長くなったものだと思うのである。1964年度の名古屋大学教育学部紀要第11巻の論文「生活と教育の結合の基本」が私の最初の紀要論文であり、それから今日まで約25年間、勤務校の名古屋大学と鳥根大学の紀要に約20本の論文（共同研究を含む）を載せている。その中で本附属校の紀要に載せた論文が一つだけある。それは本紀要が第30集を迎えたとき、記念号として学部教員も寄稿を求められたときである。その題目は「授業分析の課題と方法」というもので、本紀要4ページ分の短い論稿であるが、それを書くことによって、現在の私たち教育方法講座の共同研究テーマ「授業諸要因の関連構造にもとづく授業の構造分析」へのアプローチの方法を基本的にはあるが明確に把握することができた。私にとってこの論文はそういう意味において、約20の紀要論文の中でも特別重要な位置を占めていると思うのである。そういうことがあって、私は本紀要に内々感謝をし、愛着ももっているのである。

3. 研究テーマの展開

自分の紀要論文をあらためて見かえてみると、これまでにおよそ五つほどのテーマに取り組んできたことになる。一つのテーマはおおよそ数年で新しいテーマにひきつがれている。うまく展開されたテーマもあれば、ついに手さぐりの段階から脱することができないで終わったものもある。たとえば「授業諸要因の制御に関する比較教授学的実験研究」などはもう少しがったアプローチの方法があったと思うのであるが、私の本紀要に載せた論稿は、その研究に移りゆく見通しができかけてきたころに、その見通しをなんとか文章にあらわすことができた、というそんな感じをもつことができたものであった。

本紀要のバックナンバーに目を通してみると、特に部門別研究において、順調にテーマ展開がなされている時期の論文、あるいは難渋している様子の見られる論文等があり、前年度のテーマが翌年度の紀要に見られないときなどは、ちょっとゆき詰まったかなと思ったりもする。

しかし概してみれば、研究が忍耐強く継続的に行われているように思うのである。紀要というものは、研究の成果を各段階においてまとめあげていく場であるだけに、あとから見かえてみると、いろんな感慨がおこってくるのであるが、そこに紀要というもののおもしろさもあるのではないかと思うのである。

私は毎年紀要の原稿の締め切りをむかえるとき、しばしば自分の研究はいったいどういうものなのだろうと思うときがある。そのときどきのそうした自問に対しておこる私自身の内部の反応に、研究の進展状況がいやおうなしに反映されていることを意識するときは、テーマ展開が難渋している場合が多いように思う。しかしまあ来年があるから、こんなところで辛抱しておこう、とそれなりに気分を柔らかくしてくれるのも、紀要というもののありがたさではないか。

そのような気分の中で研究を持続させていくとき、それなりに新しい研究の展開が生みだされてくる。そうしたことを本紀要にも期待していいのではないかと考えるのである。